明日の新潟を築く

二百十キロの猛スピードで疾走する上越新幹線。初の日本列島横断の大動脈だ。

人の動きが早くなり、大量の情報や文化、ファッションなどを運んでくる。われわれの生活にも微妙な変化が押し寄せてきている。

こうした中で、新潟の産業、文化を守り育てようと、新潟の大地にしっかりと根を降ろし、今日も黙々と励んでいる若者たちがいる。

明日の新潟の担い手として…。

若き杜氏を目指して

内山 広志さん（18歳・五十嵐中島）

新潟の酒のうまさは全国に知れわたっている。うまい酒を造るには、良質の米と豊かな水・気候が必要だ。そして何よりも杜氏の腕が物を言う。杜氏は酒蔵の顔である。

内山広志さん、十八歳。昨年三月県立吉川高校醸造科を卒業し、市内のある酒造メーカーに勤めた。県内で最も若い酒造り職人だ。

「学校で勉強してきたのと実際とは随分違う」。戸惑いながらも、「一日も早く一人前になりたい」と、ファイトを燃やす毎日である。

日本酒離れが進む若者をどう引き留めるか、日本酒メーカーの課題だ。酒造りにも若い感覚が必要な時代である。内山さんにかかる期待も大きい。

杜氏への道は遠い。最低で二十年はかかる。まだスタート地点に立ったばかりだ。新潟の酒の名誉を守るため、ガンバレ！内山さん。

全国市場を相手の若きファッションデザイナー

洪田典子さん（24歳・小金町）

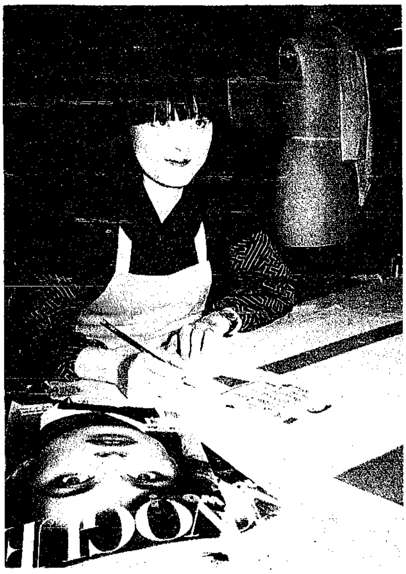
表参道や青山通り、日本のトップファッションが行き交う道を新潟女性がデザインした服を身に付けた女性が歩いていく。考えただけでも気分がいい。その仕掛人が洪田さん。青山にアトリエのある婦人服メーカーの企画主任、若きファッションデザイナーである。「販売先は東京をはじめ全国各地です」。

一見華やかにみえるこの仕事も「売れて当たり前」、常にフレッシャーが付きまとう。

「パリからの最新情報や渋谷にあるアンテナ店の売れ筋、それに雑誌などから常に新しい情報で、一歩先をいくデザインを考えます」。この仕事企画が勝負となる。

東京のデザイン学校でスタイル画やデザインを学ぶ一年間、新聞配達をやりとおした。

「どんなに流行が変わっても、着心地の良い服、洗練されたイメージの女性が着る服を作っていきたいですね」。



漆のよさ見直さす若い力

小山 光秀さん（29歳・豊3）

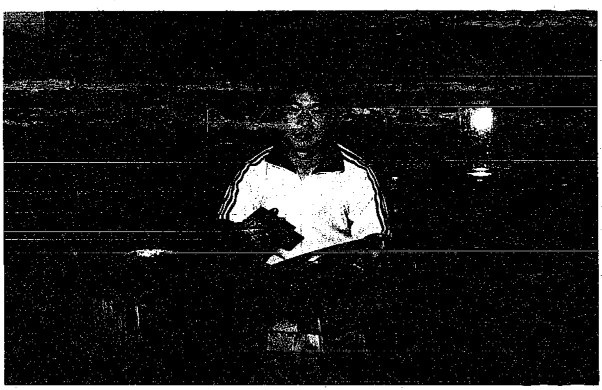
二百五十年の伝統を誇る新潟漆器―。後継者難の業界にあって、若手のホープとしての期待も大きい。

家は元来、木工所。「木地作りだけでなく塗りもやれたら」というお父さんの永年の夢に進んで応えた。

五十五年に県の新作製品コンクールで中小企業庁長官賞受賞して以来、漆器部門で三年連続最高賞を得た。全国的にも技術レベルの高い新潟で、塗りの腕前は一級品。

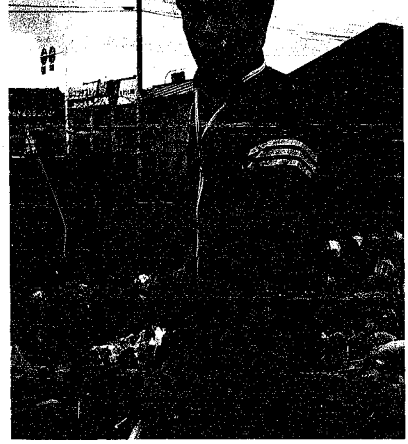
漆の中でも黒の無地が最高と言われるが、黒呂色仕上げの作品に一番魅力を感じ、好んで製作している。テーブル、飾り棚、茶具…彼の手から次々と見事な光沢の漆器ができ上がる。

「伝統的技術を基本に現代人の生活にマッチしたものを作り、漆の良さを見てもらいたい」「どこまでも勉強です」と言う小山さん。物を作る喜びを知る貴重な若者の一人だ。



"コシヒカリ"の味を全国に

大坂（だいさか）幸治さん（26歳・女池）



新潟が誇る日本一のうまい米"コシヒカリ"作りに励む大坂さん。

巻農業高校を卒業し、迷うことなくこの道に。昨年三月、地域農業の中心となるべきリーダーとして「県青年農業士」に認定された。

田畑四・二ヘクタールを耕し、米のほかにナガナス、キャベツ、バレイショなどの夏野菜や冬の味覚女池トウナを作る。

「地区内が市街化している中で、水の管理、日照、薬剤散布などが大変」と町の中での農業の難しさを語る。

周りには住宅が建ち並び田んぼがつぶれた。この地区のほかに白根市や曽野木、両川にも水田を持ち、毎朝通う。

「今後は規模を拡大し、安定収入を図り、楽しい農業を目指す」。「米はダブついているが、うまい米なら必ず売れる」と農業に自信と誇りを持つ頼もしい後継者だ。

謹賀新年

昭和五十八年一月一日

新潟市議会議員

新政クラブ
伊藤稔　川島勝　神田三吉　笹川隆三　高野一　中原八郎　野沢寛郎　藤塚仁一郎　藤巻キソ　松原藤衛　若林忠藏　渡辺惇夫

日本社会党議員団
大和吉男　副議長 大桃十三雄　阿部央一　山田武雄　滝沢正雄　羽田秀男　細野博　佐々木武夫　服部信吾

市政クラブ
加藤大輔　村山勇一郎　平田甚　議長 大野久　氏田進　仁多見一彦　伊藤実

日本共産党議員団
須田清　佐野誠一　山田修一　高橋弘之　渋谷明治　今井ヨシイ

同志クラブ
河野弘　小山徳一　丸山富保　大石一郎　橋本仁　斎藤定雄

公明党
小林茂樹　長谷川孝幸　佐々木博英　土屋利信

民社党議員団
小林茂雄　佐々木茂　田中実　島田繁雄

自由クラブ
倉田勇吉　吉川平一

無所属
早福卓